

3人のアドヴァイザーが語る 今年の音楽祭の魅力。



「ラ・フォル・ジュルネ金沢」から一新し、2年目を迎える「いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭」。今回はモーツァルトをメインテーマに据え、過去最大の2,300人の出演者が参加する。そんな音楽祭の聴きどころや楽しみ方について、音楽ジャーナリストの潮 博恵さんを進行役に、作曲家の池辺晋一郎さんと音楽評論家の響 敏也さんの3人が語り合った。



多くの人に愛される
モーツァルト。幅広い
音楽世界に触れられる。

潮 博恵(以下、潮) ● 昨年の「ベートーヴェン」に続き、今回の音楽祭のテーマが「モーツァルト」となったことについてはどう感じられますか？ また「モーツァルト」を取り上げる面白さはどのあたりにあるのでしょうか。

池辺晋一郎(以下、池辺) ● 初めの2回にベートーヴェンとモーツァルトを取り上げるのは順当な選択ですね。音楽史上最も重要で、多くの人に親しまれるトップ2ですから。しかも、いずれもあらゆるジャンルの作品があり、全方位的であることも共通しています。

潮 ● 朝から晩まで演奏する音楽祭の性質から言っても、モーツァルトの幅広い音楽性は、一日中巡りながら聴き続けても疲れませんか。

響 敏也(以下、響) ● ベートーヴェンは聴き手の精神を高揚させ「人類の勇気の味方」になってくれる。けれど好きな子との初デートを盛り上げる音楽に『運命』を選ぶ人は少ない(笑)。これがモーツァルトの場合だと、彼の心の風景を映すように、いつ見上げてても青空だけれど、この青空はなぜか哀しい。その青空の見え方で、様々な世代や人々にモーツァルトが愛されてきたように思います。それに、あれだけ多くの名曲を残しながら



潮 博恵 (うしお・ひろえ)

20年以上にわたり国内外のオペラ、オーケストラ、音楽祭に出かけ、音楽の体験だけでなく芸術活動を支える仕組みや聴衆のウォッチングを続ける。著書に『オーケストラは未来をつくる』『古都のオーケストラ、世界へ!』(アルテスパブリッシング)など。新聞やオーケストラのパンフレットへの寄稿も多い。

モーツアルトって人は、音楽史の流れを変えようという仕事はしていないんですね。時代の枠の中に居ても個性を發揮する自信があつたんでしょう。

貴族文化のもとに 花開いた能とオペラの 融合に期待大。

池辺 ●今回、能と『皇帝ティートの慈悲』のコラボレーションをすることになりました。能は元々日本の貴族文化の中で育ってきたものだから、それにふさわしい作品は何だろうと考えるのと『フィガロの結婚』や『コシファン・トゥツァ』じゃ合わない。ならば『皇帝ティートの慈悲』と能が結び付くと面白いんじゃないかという発想があつて、それが実現できることが嬉しいですね。

潮 ●この作品はストーリーが複雑です。一つの柱は、愛する人への思いと友情の中で引き裂かれるところ。もう一つの柱は、友人に殺されようとした苦悩、つまり許すべきかどうか、究極の選択を迫られた人間の心理を描いているところ。それらを能でどう表現するのか。音楽に付加するのか、または音楽では描けないものを表現するのか、どんなアプローチになるのか大いに期待しています。

池辺 ●『皇帝ティートの慈悲』のシノプスは、日本で置き換えれば、きつと世阿弥が考えただろうというような内容です。そういう面でも非常にいい曲の選択だと思つています。

潮 ●音楽的にも難易度が高いので、歌手にも負荷がかかってしまうのですが、今回、メゾソプラノ歌手の鳥木弥生さんが「ぜひ」と手を挙げてくださいました。

七尾出身でオーケストラ・アンサンブル金沢との共演でデビューした方です。

響 ●本来、能とオペラは、水と油のようなものなんですね。能は心の内へ内へと入って行き、いかに動かぬかを算段する。オペラは外へ外へと発散して常に動こうとするもの。それがせめぎ合う瞬間が生まれたら面白いでしょうね。

知らなくても彼のオペラは好きというファンが多いぐらい、オペラへの人気が高い。モーツアルトのオペラを聴いた観客は、コンサート後に照明がどうだったとか、ソプラノがどうだったとか、細かい演出のことなどは口にしない。「ああ、面白かったね、楽しかったね」と終わるだけでいい。妙にシビアにならないのがいい。その意味では、『フィガロの結婚』から名付けられた「ラ・フォル・ジュルネ」の志を受け継ぐつもりで、誰もが熱狂するような一週間になればいいのでは。

響 ●モーツアルトのオペラの大詰めでは、そりゃないだろうという荒唐無稽な結末でも、大団円の圧倒的なコーラスが、すべて押し流して強引に納得させられる。ズルいなって思います(笑)。

観る人を惹きつける 趣向を散りばめた 傑作オペラが勢揃い。

潮 ●オペラのハイライト5作品については、どう感じていますか？

池辺 ●モーツアルトはオペラ作家だと言いつける人もいますし、たくさん曲を



響 敏也 (ひびき としや)

作家・音楽評論家。トランペット奏者として演奏活動後、放送作家の執筆活動に入る。さらに「作家・音楽評論家」として評論や随筆を新聞雑誌等に執筆。近年は詩作や作詞に力を注ぎ、作曲家・宮川彬良と新しい「うた」を連作中。著書:親父の背中にアンコールを〜朝比奈隆の素顔の風景など 舞台作品:歌劇《あしたの瞳》、歌劇《ブラック・ジャック》、オペらくごの創案、脚本。



池辺晋一郎 (いけべ・しんいちろう)

作曲家。尾高賞、日本アカデミー賞最優秀賞など受賞多数。2004年紫綬褒章受章。主要作品は交響曲 No.1～10、オペラ「死神」「高野聖」他。演劇音楽はこれまでに約500本を担当。石川県立音楽堂洋楽監督、東京オペラシティ・ミュージックディレクター、横浜みなとみらいホール館長などを務める。

池辺 ● そうですね。モーツァルトはオペラを作曲するときは、普段とはちよつと姿勢が違っていて、例えば『ドン・ジョヴァンニ』の中に『フィガロの結婚』の引用を入れるとか、普通はやらないことをして面白がついているところがあるんです。そういう世界こそが、このフェスティバルの性格にぴったり合っているんです。

響 ● そう、モーツァルトは、どんな長い曲でも一瞬で全部の音符が浮かぶ…と手紙に書いてますね。その瞬間完成型の天才にして、なおも時間をかけねばならないのがオペラでしょう。人が書いた台本を読まねばならないし、歌詞に合わせねばならない。自分一人ひらめいてるわけにいかない(笑)。そこでモーツァルトのオペラは「瞬間で完成できる天才が時間をかけた奇跡の贅沢品」と私は呼んで

います。

モーツァルトの能手から若手までが繰り出すピアノソナタ全曲に注目。

潮 ● 今回、プログラムに組まれている多彩な協奏曲も聴きどころの一つです。ソリストや作品についてどう思われますか？

響 ● まさに適材適所というしかない、ふさわしい内容だと思います。

池辺 ● 昨年、約30年ぶりにピアニストのピーター・レーゼルが来日し、紀尾井ホールでの勢いのある演奏で観客を魅了していました。そのレーゼルがこのフェスティバルで演奏するというのだから見逃せません。また、横山幸雄さん、菊池洋子さん、三浦友理枝さんと、とってお



じゃないでしょうか。全曲披露するコンサートにはお客が多く入ると言われるくらい、日本人にとって「全曲」というのは魅力的なんじゃないかな。

響 ● そうそう、確かにCDも全集ものも売れ行きはともいいそうですからね。

潮 ● ピアノソナタは、ビッグネームの巧みな演奏に加えて、若手ピアニストも多く参加するので、フレッシュな演奏も楽しめそうです。

池辺 ● 特に菊池洋子さんはモーツァルトのスペシャリストとも言われています。その彼女がソナタを弾くというのは素晴らしいですね。

潮 ● 彼女がYouTubeにアップしている『トルコ行進曲』は凄くインパクトがあります。そういったことでも興味を持って皆さんが来てくださったらいいですね。しかも今回は交流ホールで行われるので、気軽により多くの人に聴いてもらえるのではないのでしょうか。

池辺 ● 確かに、ピアノ・ソナタをコンサートホールで演奏すると、ある意味ではマニアックになるし、ちよつと学問的になりがち。音楽祭では、そういう音楽の勉強みたいなことは抜きに、ただ単純に楽しもうじゃないかという姿勢が大切じゃないでしょうか。

この音楽祭も独自開催になり今年が2年目。今後この街ならではの発展をするために、勢いをつける大事な年です。

きのピアニストがたくさん揃いました。もちろん岩城宏之さんの夫人である、木村かをりさんも出演してくれそうですしね。それから、プログラムの中では、ソナタ全曲を演奏するという企画が面白い